

『胎産書』の「始」

大形徹

はじめに

「始」は「はじめ」と讀まれ、「胎」は「胎兒」の意味で使用されることが多い。ただし、辭書には「始」と「胎」が通用する例が記されており、「始」と「胎」は同源の文字ではないかと推測される。ひるがえって、文字の構造を檢討してみれば、「始」は女偏に「台」であり、「胎」は肉月に「台」である。胎兒は女性と關連するため、肉月であるよりも、むしろ女偏である方がふさわしいように思われる。

一、『胎産書』にみえる「始」

馬王堆一號漢墓から、『胎産書』(圖1)と呼ばれる帛書が出土した。この書物には本来、書名がなく、馬王堆帛書整理小組が、その内容を檢討した上で、この名をつけたとされている。「胎産」という言葉は、のちの文献にあらわれ、その内容も胎兒と出産に關わる話であるため、適切な命名といえる。この書物では胎兒が一ヶ月ごとに成長していく様子が記されている。

しかしながら、疑問とされるのは、『胎産書』の本文中に胎兒を示

すはずの「胎」という文字が一つもあらわれないことである。けれども「胎」と旁の部分が同じである「始」(圖2)(圖3)(圖4)という文字はあわせて七箇所もあらわれるのである。『胎産書』と類似の内容をもつ書物は後世、いくつが存在する。その中では「胎」という文字が使用されている。簡単に考えれば、當初、「始」であったものが、「胎」におきかわったようにみえる。しかし、「始」と「胎」が並んで使用される例もあり、そのことだけを見れば「始」と「胎」は區別されているということになる。

けれども、ふたたび『胎産書』にもどって考えると、そこに「胎」という文字が一つもないのは不思議である。また「始」という文字が七箇所もあらわれるのは、いかにも多すぎるのである。

これまで、『胎産書』の「始」は例外なく、「はじめて」「はじめる」の意味で現代中國語に譯されていた。けれども、その中國語譯を檢討してみれば、本文のどこにもない「胎兒」という語が補われて、現代語に解釋されていることがわかる。

たとえば、「二月始膏」の部分の馬繼興氏の語釋は、

妊娠兩箇月の時候稱爲「始膏」。此時在胎兒體內開始成長膏滋⁽³⁾。

(妊娠二ヶ月の時期を「始膏」という。この時、胎兒の體內で膏滋が成長し始める)

となる。

そのすぐ後の「是胃(謂)始臧(藏)」は、

這時就叫做「始臧」、意思就是孕婦的生活起居必須開始逐步收斂⁽⁴⁾。
(この時、「始臧」という。その意味は、妊婦の生活の起き伏しは、かならず、しだいに慎重になりはじめるべきであるからだ)

とされている。

「始臧」はそのまま使われているが、あとの解釋をみれば「始」を「開始」、「藏」を「收斂」と譯している。これにもとづいて、「始臧」をあえて訓讀すれば、「是れ始めて臧(藏)さると胃(謂)う」となる。しかし、これは、「是れ始(胎)に臧(藏)さると胃(謂)う」ではないか。これは「胎藏」の意味である。

「膏」は豚の脂のことである。軟膏のようなものと考えればよいだろう。馬氏のいう「膏滋」は「膏滋」薬として使われる言葉である。

胎兒がまだきちんとした形をしていない状態を述べている。

前漢から後漢にかけての緯書『春秋元命苞』は「膏者神之液也(膏は神の液なり⁽⁵⁾)」と述べているが、「神」を「精神」「たましい」のイメー
ジだと考えれば、人の精神的部分の根幹がすでにそなわっているよう

にみえる。

さて馬氏の現代中國語での語釋では原文にはない「胎兒」という言葉が補われていることに氣づく。「二月始膏」の「始」は「開始」とされているので、馬氏は「二月(胎)始膏」と原文に「胎」を補った上で現代語にしているということになる。そもそも中國語は主語と述語がはっきりしている。もし「始」を「はじめて」「はじめる」の意味で解釋してしまえば、その文章に主語の部分がなくなってしまう。そこで「胎兒」を補わないと不完全な中國語になってしまうのである。

以下、

「三月始脂」は「妊娠三箇月の時候稱爲「始脂」。即胎兒開始生長油脂」。

「四月…始成血」は「這時胚胎的發育開始產生血液」。

「五月…始成氣」は「這時胚胎的發育開始出象「氣」的活動」。

「六月…始成筋」は「這時在胚胎裡開始生長筋肉」。

「七月…始成骨」は「這時在胚胎裡開始生長骨骼」。

「八月…始成膚革」は「這時在胚胎裡開始生長皮膚」。

「九月…始成毫毛」は「這時在胚胎裡開始生長毛髮」。

と、ここでは「胚胎」という言葉を補いながら、また「始」については「開始」と現代語譯されているのである。

「始」を「始めて」と讀むことは、漢文の口調としても、ふつうのことである。そのため、そう讀んでしまいたくなる。しかし現代語譯

するときに「胎兒」あるいは「胚胎」という言葉を補わねばならないというのとは不自然ではないだろうか。

水上静夫氏は、「始」について、「字音」音符の「シ」は、…はらご。みごもる(↓胎)意を示す」と解説する。この説によれば、「始」であっても「胎」と理解しうる。

これによって、もし當時、「始」の文字を「胎」の意味で使用していたとすれば、

「二月始膏」は、「二月始めて膏す」ではなく、「二月始(たい)脂膏す」、

「三月始脂」は「三月始めて脂す」ではなく、「三月始(たい)脂す」、

「四月…始成血」は「四月…始めて血を成す」ではなく、「四月…始(たい)血を成す」、

「五月…始成氣」は「五月…始めて氣を成す」ではなく、「五月…始(たい)氣を成す」、

「六月…始成筋」は「六月…始めて筋を成す」ではなく、「六月…始(たい)筋を成す」、

「七月…始成骨」は「七月…始めて骨を成す」ではなく、「七月…始(たい)骨を成す」、

「八月…始成膚革」は「八月…始めて膚革を成す」ではなく、「八月始(たい)膚革を成す」、

「九月…始成毫毛」は「九月…始めて毫毛を成す」ではなく、「九

月始(たい)毫毛を成す」

と讀むことが可能となる。

もしそうであれば、わざわざ、「胎兒」や「胚胎」という語を補わなくてもよいのである。

二、傳世文獻にみえる「胎」と「始」

「胎」は比較的遅くあらわれた文字である。『莊子』外篇、知北遊に「九竅者胎生、八竅者卵生」とみえ、あとは『禮記』に五カ所みえ、ほかに秦、呂不韋の編纂した『呂氏春秋』にも五カ所みえる。その後、漢代の文獻には、比較的多くあらわれる。

「始」については『論語』だけでも七カ所みえ、数え切れないほど多い。

傳世文獻は、作られた當時、どのような字體で書されたのかは實際にはよくわからない。筆寫を重ねるごとに、その當時の字體によって寫されていったのだろう。そのことは『老子道德經』のもととなった書物が、郭店楚簡、馬王堆帛書にみるように、それぞれ字體が全く異なっていたことを見ればよくわかる。

胎産書と他の書物との比較表(附表三)

同じ内容の記事が、筆寫される過程で語句の異同がおこることはよくある。誤寫が多いと思われる。しかし所載の書籍の字數などの制限で省略されるような場合もある。表を作り、比較することによって、

それらの考察が可能となる。

『廣雅』にみえるものは、「人一月而膏、二月而脂、三月而胎、四月而胞、五月而筋、六月而骨、七月而成、八月而動、九月而蹠、十月而生。殪（古來）腓（媒）胎也。（ ）は割注」である。基本的に『胎産書』と同文であるが、『胎産書』にあった「始」の部分がすべて、削除されている。

『胎産書』と『廣雅』はよく似ている。しかし『廣雅』は辭書であり、簡潔に記述する必要からか、『胎産書』の二、七月にあった「胎」の文字が省略されている。そのかわりなのか、十月の記述のあとに「殪腓胎也（殪（がい）、腓は、胎なり）」とみえ、ここで「胎」の文字を記している。殪（がい）は『説文解字』に、「殺羊出其胎（羊を殺して其の胎を出だす）」とあり、玉篇讀みは、「ハラゴモリ、サク」であり、腓（ばい）の玉篇讀みは、「ハラム」。この割注では、「腓（ばい）」は「媒」とされる。「媒」には「1. なこうど、なかだち。2. とりもつ、仲介。3. おとり。4. 靈（ばい）と通じ、くらい⁽⁸⁾」という意味がある。そこには、はらむ、あるいは「胎」という意味はない。しかし、この割注は、「媒」が「ハラム」という意味になる。また「殪腓胎也（殪（がい）、腓は、胎なり）」は、「殪媒胎也（殪（がい）、媒は、胎なり）」と同じだとすれば、「媒」は「胎」ということになる。これは女偏の「媒」

と肉月の「腓」が同じということになる。これは假借の例となりうるのではないか。これが成り立つならば、女偏の「始」と肉月の「胎」が同じだといえる。

さて『胎産書』で「始」であったものが、『逐月養胎方』その二では「妊娠一月始胎」と「始胎」とされている。「始」と「胎」が同時にあらわれているため、これは「始」が「はじめ」、「胎」が「胎兒」の意味で讀まれていたということの證左となりそうである。だが、もうすこし考えてみると、「始めて」だけでは、意味が通じにくいために、當然、あるべき「胎」を補ったものと考えられる。あるいは「始」を「胎」の通假字として讀まねばならないところを、そのまま「始めて」と讀んだため、あらためて「胎」を補ったのかもしれない。

三、出土した文字資料にみえる「胎」と「始」

さて出土文獻などで、実際に書され、あるいは刻された文字はどのようなであろう。

胎

一九八四年初版の白川靜『字統』は『説文解字』の篆書のみである⁽⁹⁾。水上氏は『古文字類編⁽¹⁰⁾』から一例あげる。篆書は『説文解字』のも

表1

『胎産書』	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	
『廣雅』	一月名曰留刑 人一月而膏	二月始膏 二月而脂	三月始胎 三月而胎	四月始成血 四月而胞	五月始成氣 五月而筋	六月始成筋 六月而骨	七月始成骨 七月而成	八月始成膚革 八月而動	九月始成毫毛 九月而蹠	十月而生	殪腓胎也。

の一例である(圖5)。また戦國時代の金文である「墜胎戈」の「陳胎之右柴戈」⁽¹³⁾をあげる。これは『殷周金文集成』1127(圖6)、『中國漢字文物大系』⁽¹⁵⁾に収録されるものと同じ文字である。この字形は「人名」⁽¹⁶⁾とされているが、傍の上部のム部分⁽¹⁷⁾が二重になっている。これは傍が「台」である字形とは異なっている。後世も、そのような構造をもった文字が見当たらないため、文字をそのまま「胎」と理解するには、若干、疑問が残る。また戦國中期とされる天星觀楚墓竹簡T74⁽¹⁷⁾の寫真にみえる。さらに郭店楚簡の『窮達以時』の中に「胎」の文字があるとされる(圖7)。

江村治樹主編『馬王堆出土醫書字形分類索引』、陳松長編著『馬王堆簡帛文字編』、李正光編『馬王堆漢墓帛書竹簡』には見えない。馬王堆出土の書物の時代に「胎」の文字は、すでにあつたはずだが、この文字が使用されていないのである。

『漢魏六朝隋唐五代字形表』⁽²¹⁾によれば、隸書(唐3例)と楷書(北魏1例、東魏1例、唐3例)がある(圖8)。『說文解字』胎の見出しの文字は篆書であるため、當時、隸書の字體もあつたはずだが、實際の出土例には漢代のものが見当たらない。『字源』⁽²²⁾は系統圖を作つて(圖9)のようにする。戦國期の金文にいくつかみえるものの、漢代の隸書にはないことが反映された圖になっている。

始

『字統』には甲骨文の例はなく、金文の用例が4例⁽²³⁾(圖10)あげられる。『甲骨金文辭典』は甲骨文の字形を4例あげ、金文を22例あ

げる(圖11)。『馬王堆簡帛文字』では隸書の用例が5例あげられるが、なぜか『胎産書』の例はとられていない。『簡牘帛書字典』では隸書が74例あげられる(圖12)。ただ、さきにも述べたように「胎」の隸書は漢代の出土例としては管見の限り皆無である。『漢魏六朝隋唐五代字形表』では篆書(後漢2例、隋2例、唐1例)、墨書の隸書(秦2例、前漢9例、漢晋3例)、石刻の隸書(新1例、後漢3例、晋1例、北齊1例、隋3例、唐3例)、楷書(北魏3例、隋3例、唐3例)があげられている(圖13)。『漢魏六朝隋唐五代字形表』にあげられている用例を比較すると「胎」は8例、「始」は40例と壓倒的に「始」が多い。注目すべきは、墨書の「始」が筆の流れで一見、「胎」に見えるものがある(圖14)(圖15)ことである。

四、假借の例

『戰國秦漢簡帛古書通假字彙纂』⁽²⁵⁾には多くの通假例がしるされている。己字聲系として、台與始、台與治、台與怡、台與殆、台與胎、台與怠、始與以、始與似、始與笞、始與貸、始與辭、始與泉などの通假例が記されている。このうち、「胎與泉」は、郭店楚簡中の『窮達』の中の語で、「胎」と書かれているものを「泉(シ)(からむし)」と讀むべきだという意味である。李零氏によれば、⁽²⁶⁾「泉」の音が「シ」であるため、この「胎」は「タイ」ではなく、「シ」と讀まれていたと解釋されたのであろう。

「胎」も「始」も「己」あるいは「台」という文字からはじまっている。文字の用例が重なってくれば、偏や旁をつけて、その用法を細

分化していき、異なる文字として獨立していくのであろう。

ここでは「胎」と「始」の通假する用例は見いだせなかったが、「胎」を「シ」と讀むなら、「始（シ）」と「胎」が通假してもおかしくはない。

五、「始」を「胎」の意味で理解するという説

「胎」が「始」であるという説はさきに紹介した。馬紱倫『説文解字六書疏證』は、「始」が「胎」の意味であったと述べる。

兪樾曰く、始の初と爲すは、固より恆の訓なり。然れども其の字を以て女に従いて女の初めと云うは、則ち附會に近し。女の初を始と爲さば、男の初は何れの字と爲すや。今、按ずるに始は生なり。易の象傳に曰わく、大なるかな乾元、萬物資りて始まる。至れるかな乾元、萬物資りて生まる。禮記、樂記に曰わく、樂は、其の自ら生まるる所を樂しむ。禮は其の自ら始まる所に反る。皆な生、始を以て並びて言う。蓋し字異なりて義同じ。檀弓に曰わく、君子は始を念ずるの者なり。鄭注に。始は猶お生のごときなり。此れ其の本義なり。人の生を始と謂う。故に引申して最も初めなる者の稱と爲すなり。始の本義を生と爲す。故に字、女に従う。倫按ずるに始は胎の異文爲り。人の生は胎より先なるは莫し。胎は母腹に在りて未だ形あらずと爲す。故に易は乾に於いて始と言うなり。老子に、無は、天地の始に名づく。義も亦た同じなり。始は之の後起の字爲り。女の初なりは本訓に非ず。且つ或いは女の口なり、初なりの二訓。校者刪りて之れを并わせるのみ。字、

急就篇に見ゆ。李良父盍仲に作り、頌散啓に作る。²⁸ 卷二十四、始

馬紱倫は兪樾の説を紹介する。兪樾は『説文』の「始」は「女之初」という説に反對して、それならば「男之初」をあらわす文字はあるのかという。「女之初」に關しては、初潮とからめて解釋されることがある。²⁹ 兪樾は、そのことには觸れていない。つぎに『易』の「萬物資始」と「萬物資生」、『禮記』樂記の「樂、樂其所自生」と「禮、反其所自始」が互文のような構造になっていて、いずれも「生」と「始」が並べられることを指摘し、「おそらく文字は異なっても意味は同じである」という。また同じく『禮記』の檀弓をひき、「君子念始之者也」の鄭注の「始は猶お生のごときなり」を引き、「始」と「生」が同じだと確認した上で、「始」の本義が「生」であるとする。そしてそのことから、人の「生」が「始」であり、それは「女偏」だということ。

馬紱倫は、兪樾の説を踏まえた上で、「始は胎の異文である。人の生は胎より先のものはない。胎は母の腹のなかで、まだ形のないものである」という。ここは、「始」に「胎」の意味があるという説である。馬紱倫は、その説を敷衍して、『易』の乾にみえる「始」と、『老子』の「始」もまた「胎」の意味を含んでいるという。

つぎに邵筮農『一圓闡字説』の説である。

◎邵筮農 爾雅初哉首基肇祖元胎、始なり。説く者、謂えらく、

初は衣を裁つの始。基は牆を築くの始。肇は戸を開くの始。哉は草木の始、祖は人の始、元首は身體の始、胎は生の始、と。郝懿行云う、字毎に皆な本義有り。但だ俱に始と訓ずるのみ。兼通するを得るを例とす。竊かに謂えらく始の字も亦た本義有り。段借りて聲を發するの詞と爲し、終始の訓を爲すに及ぶと爾云う。本義に云う。始は即ち胎なり。人の生の初肇なり。胎は、孕むなり。孕も亦た暍（よう）媿（よう、はらむ）に作る。子に从い、肉に从い、女に从う。皆な胎に通ず可し。又た殆（たい、はらむ）に作る。子に从う。廣韻、胎は始なり。説文に曰わく。婦孕みて三月なり。殆上に同じ。是れ胎殆、同字。媿字を以て之れを例うれば、始は女に从い亦た胎の字なり。或るひと謂えらく、始を以て胎の字と爲せば則ち胎は始なるも、啻だ胎胎、或いは始始と云わざるのみなり。此れ解釋を爲すに訓詁亦た此の法無きを恐れ、同字相訓ずるを知らざればなり。爾雅に固より此の例有り。酒と雖も乃なり。酒（乃？）は即ち酒字の省なり。乃と同字ならず。當に例外に在るべし。而れども嗟は咨、嗟なり。敖は憚、傲なり。嗟、嗟、敖、傲、同一の字に非ざるか。始の字自り引伸して初、始と爲る。而らば胎、孕、専ら寫して肉に从い旁、胎に作る。習い久しく相い沿う。二字遂に判ちて乃ち始と謂い、女の初めと爲る。而れども男の初め專字無し。滋生、疑竇を免れざるのみ。若し變じて人の初めの字と言え、則ち疑義昭然たり。³⁰ 卷二

ここでは郝懿行の説をひくが、「字ごとに本義有り」という。すべ

ての文字には本來の意味があるという。俞樾の本義説と同様である。「始」については、「始は即ち胎なり」と「始」と「胎」が同じだとし、人の生のはじめが胎だという。そして「胎は、孕むなり」とした上で、孕と暍（よう）媿（よう、はらむ）の文字が同じだとし、部首が「子」であっても、「肉」であっても、「女」であっても、みな「胎」に作るとして、「殆（たい、はらむ）」の文字の例をあげる。

上記の例は、いずれも假借ではなく、實際の使用例でもないが、理論上、「始」が「胎」と理解しようという。

おわりに

馬王堆の文獻をはじめ、出土資料を読む際に、つねに悩まされるのが通假字の問題である。ある漢字をそのまま読めば意味が全く通じない。そういった場合に通假字を見つかることで解決できることが多い。現在、数多くの通假字典が出版されており、有益である。拙稿でとりあげた「始」と「胎」についても、通假字典にその用例が記されていれば、ここで、あえて取り上げる必要はない。ところが、管見の限り、種々の通假字典を検索しても、「始」と「胎」の通過する例が記されていないのである。

傳統的な辭書には、「胎」を「始め」の意味で理解する例がいくつも記されている。ところが、逆に「始」を「胎」の意味で理解する例は記されていない。俞樾、郝懿行、馬紱倫、邵笠農などは、理論の上から「始」を「胎」と理解している。しかし通假の問題にはふれず、また實際の文章の中で「始」を「胎」と理解してよい例があげられて

いるわけでもない。水上静夫の辭書も同様である。

拙稿で問題としたのは、『胎産書』という出土資料の實際の使用例である。そこにあらわれる「始」は「胎」の意味で讀んだ方がわかりやすい。これまで、この「始」は、ふつうに「始め」「し始める」と理解されていた。そのままでは意味がまったく通じなくなる他の通假字の例とは大きく異なり、「し始める」と譯しても何となく意味が通じてしまう。ところがじつは文章に主語となる部分が缺けており、微妙に違和感を感じるのである。「始」を「胎」の通假字とみなすことによって、その違和感は解消される。

そのことを實際に出土した「始」と「胎」の例と比べ、上記の推測の裏付けとした。「始」は金文の時代から滿遍なくみえる。とくに前漢・後漢の時期には大量にある。一方、「胎」は、戦國時代の金文の例が二、三例あるものの、字形が微妙に異なるものもある。また前漢、後漢の字形は管見のかぎり一例も見當たらぬ。將來、出土する可能性はあるが、馬王堆の『胎産書』の時代では、「胎」の文字は、ほとんど存在しなかったのではないか。おそらく「台」あるいは「始」が「胎」の意味で通假字として使用されていたのであろう。文字の成り立ちからみても、女偏の「始」の方が、胎兒をあらわすには、本來、ふさわしい文字のように思われる。

しかし、「始」が「はじめ」の意味で使われることが多くなるにつれ、區別のために「胎」の文字をしないで使用するようになったのではないだろうか。

註

- (1) 拙譯『胎産書・雜禁方・天下至道談・合陰陽方・十問』東方書店、二〇一五、解説において拙稿の基本的な考え方をすでに述べている。ここではそれにくわえて、實際に出土した漢字をとりあげて、検討することに留意した。圖版は馬王堆漢墓帛書整理小組編『馬王堆漢墓帛書』肆、文物出版社、一九八五より。
- (2) ここで検討する本文は以下の附表を参照。
- (3) 馬繼興『馬王堆古醫書考釋』湖南科學技術出版社、一九九二、七八四頁。原文は簡體字。
- (4) 同右。
- (5) 『太平御覽』卷三七五、膏。他の箇所では、腦との關連で膏と述べられることが多い。
- (6) 『甲骨金文辭典』雄山閣、二〇〇七、上卷、三二〇頁、始。
- (7) 水上氏の説の根據は示されていないが、後出の表にかかげた『爾雅』の説などにもとづくのであろう。
- (8) 白川靜『字通』平凡社、一九九六、一二七二頁、媒。
- (9) 前掲『字通』も同様。
- (10) 高明編、中華書局、一九八〇。
- (11) 後出の『殷周金文集成』修訂增補本と同じである。
- (12) 前掲『甲骨金文辭典』一〇七五頁、胎。
- (13) 中國社會科學院考古研究所編『殷周金文集成』修訂增補本、中華書局、二〇〇七、四二二頁、一一二二七、戰國、青州市博物館。陳胎は姓名、榮戈は、ほし。
- (14) 中國社會科學院考古研究所編、中華書局、一九八四—一九九四、考古學特刊／中國社會科學院考古研究所編。
- (15) 劉志基主編、大象出版社、二〇一三、第四卷、四九六頁。
- (16) 前掲『中國漢字文物大系』第四卷、四九六頁。
- (17) 葛英會、彭浩編著前掲『楚簡帛文字編』東方書店、一九九二、一〇三頁。
- (18) 科學研究費補助金(總合研究A)研究成果報告書、『中國古代養生思想の總合的研究』關西大學文學部、一九八七。
- (19) 文物出版社、二〇〇一。
- (20) 湖南美術出版社、一九八八。
- (21) 臧克和主編、南方日報出版社、二〇一一。
- (22) 李學勤主編、天津古籍出版社、二〇一二、中、三五四頁。
- (23) 出典は明示されていない。
- (24) 三二〇頁。

- (25) 白於藍編著、福建人民出版社、二〇一二年。
- (26) 『郭店楚簡校讀記（贈訂本）』北京大學出版社、二〇〇二、八六頁。
- (27) 鼎文書局一九七五、三〇七〇頁。
- (28) 俞樾曰。始之爲初。固恆訓也。然以其字從女而云女之初。則近于附會。女之初爲始。男之初爲何字乎。今按始者生也。易象傳曰。大哉乾元。萬物資始。至哉乾元。萬物資生。禮記樂記曰。樂。樂其所自生。禮。反其所自始。皆以生始並言。蓋字異而義同。檀弓曰。君子念始之者也。鄭注。始猶生也。此其本義也。人之生謂始。故引申爲最初者之稱。始之本義爲生。故字從女。倫按始爲胎之異文。人生莫先於胎。胎在母腹爲未形。故易於乾言始也。老子。無。名天地之始。義亦同也。始爲并之後起字。女之初也非本訓。且或女之口也初也二訓。校者刪并之耳。字見急就篇。李良父喬作^始。頌啟作^始。
- (29) 『古文字詁林』、八一八頁所引。前揭水上靜男も同様。
- (30) ◎邵笠農 爾雅初哉首基肇祖元胎。始也。說者謂初者裁衣之始。基者築牆之始。肇者開戶之始。哉者草木之始。祖者人之始。元首者身體之始。胎者生之始。郝懿行云每字皆有本義。但俱訓始。例得兼通。竊謂始字亦有本義。段借爲發聲之詞。及爲終始之訓云爾。本義云。始即胎也。人生之初肇也。胎。孕也。孕亦作媿媿。从子从肉。从女。皆可通胎。又作殆。从子。廣韻胎始也。說文曰。婦孕三月也。殆上同。是胎殆同字。以媿字例之。始从女亦胎始也。或謂以始爲胎字也。則胎始也。不啻云胎始也。或始始也。以此爲解釋恐訓詁亦無此法。不知同字相訓。爾雅固有此例。雖迺也。迺即迺字之省。不與乃同字。當在例外。而嗟咨穉也。敖撫傲也。嗟穉敖傲非同一字乎。自始字引伸爲初始。而胎孕專寫从肉旁作胎。習久相沿。二字遂判乃謂始爲女之初。而男之初無專字。不免滋生疑竇耳。若變言人之初字。則疑義昭然矣。
- (31) 拙稿『馬王堆の胎産書・禹藏圖・人字圖』、『人文學論集』二七集で考察しているが、その記述をもとに辭書の記述、金文や考古學的な文字資料を補った。
- (32) 小川環他編、角川書店、一九六八年初版、二五五頁。
- (33) 平凡社、二〇〇七。『字統』は一九八四初版。
- (34) 宏業書局、中華民國六四年。
- (35) 同八一九頁。
- (36) 鈴木千春氏「中國古代中世における逐月胎兒說の變化 <http://www.hum.ibaraki.ac.jp/mayanagi/students/03/suzuki.html>」の表1にもとを基、縦書き用に書式を直した上で、比較する内容を大幅に増やした。また一部、改變し、必要と思われる箇所には注釋を施した。『人文學論集』二七集より、轉載の上、『廣雅』の部分を加筆した。

- (37) 管仲に假託、古いものは春秋末、戰國初期、おおむねは戰國後期から漢初。日原利國編『中國思想辭典』二管子（金谷治）、研文出版、一九八四、五六頁を参照。
- (38) 前漢、劉安「前一七九〜一二二」撰、劉文典集解『淮南鴻烈集解』、第二版、臺灣商務印書館、一九七四を参照。
- (39) 後漢、許慎「三〇〜一二四」撰。
- (40) 魏、張揖撰『廣雅』釋親。胎。魏の明帝、太和（二二七〜二三二）に博士。
- (41) 『太平御覽』太平御覽卷第三百六十 人事部一 絞人より。『文字』は老子の弟子の文子に假託『列子』・『莊子』・『淮南子』に一致するところが少なくないという。前掲『中國思想辭典』「文字（鶉尚代）」三六九頁参照。
- (42) 隋、巢元方（煬帝「在位、六〇四〜一八」の頃）撰、卷四十一。
- (43) 卷四十一。
- (44) 唐孫思邈撰「六五二成書」、宋林億等校正 四庫全書、卷二、婦人方、養胎第三。鈴木千春氏は、林億らの改訂を経ている。『新雕孫真人千金方』と比較考察を行っている。
- (45) 丹波康賴「九二〜九九五」撰、卷二十二。
- (46) 原文は留形。『馬王堆漢墓帛書（肆）』、文物出版社、一九八五、二三六頁、馬繼興『馬王堆古醫書考釋』（湖南科學技術出版社、一九九二）七八一頁は流形と解す。また、留は胎と同源字という。鈴木氏は、「流形」。
- (47) 鈴木氏の表に「懷娠一月名曰」を付加した。以下同じ。
- (48) 鈴木氏によれば、「始胎」は新雕にはない。
- (49) ；是謂始藏の部分に付加した。
- (50) 『太平御覽』は「血」。
- (51) 「名曰」がない。
- (52) 激、前掲、高文鑄等校注研究『醫心方』四四三頁、注二によれば、仁和寺本は「嗽」で「諸病源候論」と同じ。激は「嗽」の字形が誤ったのではないかとする。
- (53) 前掲『馬王堆古醫書考釋』七九一頁は「使」を「始」に作るが、注釋はない。
- (54) 鈴木氏の表は「成」に作る。
- (55) このあと、経絡・針灸に關わる表現が以下のようにみえ、「胎」という語もみえる。夫婦人任身、十二經脈主胎養胎。當月不可針灸其脈也。不禁、皆爲傷胎、復賊母也、不可不慎。宜依月圖而避之。『胎産書』は経絡とは、ほとんど關わらないため、『醫心方』の以下の部分に關しても同様に

『胎産書』の「始」

省略する。また、そのことは一々、注記しない。

(56)『醫心方』には、以下の注がある。「太素經云、一月膏、二月脈、三月胞、四月胎、五月筋、六月骨、七月成、八月動、九月躁、十月生」とみえる。前掲、高文鑄等校注研究『醫心方』、四四一頁、注一四によれば、日本の『太素』になく、楊上善注の中にもない。また『素問』、『靈樞』にもみえない。おそらく丹波康頼が引用した楊上善注の中にあつたのではないかという。

圖1 馬王堆漢墓帛書整理小組編『馬王堆漢墓帛書』肆、文物出版社、一九八五、八五頁、胎産書圖版より。

圖2 同右 乃始。

圖3 同右 始脂。

圖4 同右 始藏。

圖5 同右 『說文解字』胎

圖6 『殷周金文集成』1127、胎

圖7 郭店楚簡『窮達以時』胎

圖8 『漢魏六朝隋唐五代字形表』

圖9 『字源』

圖10 『字統』

圖11 『甲骨金文辭典』始。

圖12 『馬王堆簡帛字典』始。

圖13 『簡牘帛書字典』。

圖14 『漢魏六朝隋唐五代字形表』始。

圖15 「始」武威。『簡牘帛書字典』始。「胎」に似る。

圖16 「始」漢晉流簡。『漢魏六朝隋唐五代字形表』始。「胎」に似る。

※拙稿の内容は、二〇一五年六月二十七日に行われた《長沙馬王堆漢墓簡帛集成》修訂國際研討會（湖南省博物館、復旦大學出土文獻與古文字研究中心、及び中華書局主催、於上海錦江白玉蘭賓館）にて發表し、《馬王堆漢墓簡帛集成修訂國際研討會論文集》に《胎産書》之《始》（中國語）として收載されている。

（大阪府立大學教授）

附表一、「始」についての字書・辭書の記述^③

書名など	原文および訓讀	備考
『爾雅』釋詁第一 後漢・許慎『說文解字』十二下、始	初、哉、首、基、肇、祖、元、胎、俶、落、權輿、始也(初、哉、首、基、肇、祖、元、胎、俶、落、權輿、始めなり)	※白川靜は「女の初なり」とし、台(たい)聲の字とするが、「女の初」とは意を成さぬ語であり、聲もまた合わない(後出『字統』)とする。
晋、郭璞(276-324)『爾雅』注	胚胎未成、亦物之始也(胚胎未だ成らず、亦た物の始めなり)	※北宋、邢昺(923-1010)『爾雅』疏には、「物則形也(物則ち形(あらわ)るるなり)」とみえる。「物」は「形」としてあらわれる。「物」には「人」の意味もある。人の形としてはじめてあらわれると理解できる。
『新字源』始	「なりたち」形聲 …巴(シ)・胎と通して「始め」の意に用いる。 「意味」 一①はじめ。「同」巴・胎。 (後略)	※「始」と「胎」は同じとするが、「始め」の意味しか記されていない。
白川靜『字統』始	形聲 字の初形は姦(じ)に作り、以の初形は目(め)で耜(すき)の形。始はもと耜聲の字である。「說文」十二下に「女の初なり」とし、台聲の字とするが、「女の初」とは意を成さぬ語であり、聲もまた合わない。台は目(め)に祝禱の器である「」を加えたもので、耜を蔽い清める儀禮をいう字である。農耕の開始にあたって、まず農具を清めることが、秋の蟲害を防ぐために必要とされた。蟲害をなす蠱(ぎ)が器具のうちにひそむとされたからである。台と同じく耜(耒)と祝禱の器に従うものに加があり、これも農具を蔽う儀禮。鼓聲を加えることを嘉(か)という。加や嘉は、また男子の出生をいう語にも用いられる。それで始に「はじめ」という意がもしあるとすればそれは加・嘉に對する語で、台に胎の聲義があるとするものである。字はもと姓としての姦の字に用いられ、「詩」「書」に至って始の義に用いている。	※始の説明の中では、胎にふれていない。 ※台に胎の聲義がある。
同『字通』始	常【始】8畫 【字音】シ【字訓】はじめ・はじめる・はじまる 【字音】シ【字訓】はじめ・はじめる・はじまる 【說文解字】 【形聲】字の初形は姦(じ)に作る。以は初形目(め)、耜(すき)の初文。「說文」十二下に「女の初なり」とし、台(たい)聲とするが、聲が異なる。臺はム(し)目・耜(すき)を、祝禱を収める器「」(さい)の前におく形で、耜を清める儀禮をいう。その儀禮に女子が加わるとは、農耕儀禮と生子儀禮との相関を示すものである。農耕の開始にあたって耜を清める儀禮があり、それがまた生子儀禮としても用いられて、始生・初生の意となる。 【訓義】 1. はじめ。農耕の始めの儀禮として、農具を清める。はじめ、はじめる。 2. はじめに、はじめて。 3. すべてことのはじめ、ときのはじめをいう。	※熟語については、出典の明記されているものだけを残した。

	<p>〔古訓〕〔名義抄〕始 ハジメ・セム・ミチ 〔字鏡集〕始 セム・ハジメ・ウム・ハジム・イマシ・ミチ</p> <p>〔語系〕始^シ、才^シは聲近く、はじめの意があり、また似^シには始めをつぐ意がある。</p> <p>〔始願〕しがん(ぐわん) 最初からの願い。〔梁書、陶季直傳〕常に稱(い)ふ、仕へて二千石に至らば、始願畢(をは)ると。ノち疾もて辭し、郷里に還る。ノ死するに及び、家徒(た)だ四壁のみ。子孫以て殯斂(ひんれん)する無し。</p> <p>〔始終〕ししゅう 終始。晋・陸機〔魏の武帝を弔ふ文〕夫(こ)れ始終は萬物の大歸、死生は性命の區域なり。</p> <p>〔始末〕しまつ 始終。〔梁書、徐勉傳〕輒(すなは)ち具(つづ)さに撰修の始末、竝びに職掌の人、成す所の巻帙、條目の數を載せ、謹みて拜表して以聞(い、ぶん)す。〔上奏〕す。</p> <p>〔下接語〕開始・懷始・起始・建始・元始・原始・古始・更始・四始・資始・終始・正始・創始・太始・肇始・二始・年始・反始・本始・無始・有始</p>	
--	---	--

附表二、「胎」についての字書・辭書の記述

書名など	原文および訓讀	備考
『爾雅』釋詁第一	初、哉、首、基、肇、祖、元、胎、假、落、權輿、始也(初、哉、首、基、肇、祖、元、胎、假、落、權輿、始めなり)	※先の表の記述に同じ。
『說文解字』四下、胎	婦孕三月也。从肉臺聲。土來切(婦孕みて三月なり。肉に从いて臺聲、土來の切)。	※台聲 ※「始」、「胎」はいずれも台聲とする。本来、同じ音だったのかもしれない。けれども、『說文解字』の反切によれば、「始」は詩止切で「し」、「胎」は「土來切」で「たい」という。
魏、張揖『廣雅』釋親、胎	人一月而膏、二月而脂、三月而胎、四月而胞、五月而筋、六月而骨、七月而成、八月而動、九月而躁、十月而生。殮(古來)腺(媒)胎也。()は割注。	※胎は三月の状態。 ※殮(がい)の玉篇讀みは、ハラゴモリ、サク。 ※腺(ばい)の玉篇讀みは、ハラム。 ※腺の割り注が媒である。これは肉月の腺と女偏の媒が同じであるという意味であろう。
晋、郭璞(276-324)『爾雅』注	胎未成、亦物之始也(胚胎未だ成らず、亦た物の始めなり)	※先の表の記述に同じ。
高田忠周『古籀篇』卷四十一の四、胎。	文字の原形として歸父盤の「𠄎(台)」を擧げ、「胎」の字も亦た當に台を以て之れと爲すべし。又た或いは始を以て之れと爲す可し。 「始、胎」の二字、或いは轉注爲り	※「胎」や「始」も「臺」の文字であらわされていくという。 ※轉注は『說文解字』で「同意相受く」。「胎」に「始め」の意味があるとすれば、「始」にも「胎」の意味があるということになる。
『新字源』胎	「なりたち」形聲 肉と音符臺(シ・タイ)(きざしの意↓巳シ)とから成り、はらこ、ひいて「はらむ」意を表わす。 「意味」 ①はらこ。おなかの子。「胎兒」②はらこも。妊娠。妊娠三か月のこと。「懷胎」③はらむ。みこもる。腹に子をやどす。 ④こぶくろ。子やどるところ。子宮。⑤はじめ。きざし。「胚胎はいたい」	※「胎」にも「はじめ」の意味があり、きざし、「胚胎」とされている。

『字統』胎	<p>形聲 聲符は台。台は目(し)(相(すき))に祝禱を収める器の口(さい)をそえ、相を蔽い、清めて豊作を祈る儀禮で、生産を始めるときの儀禮である。「説文」四下に「婦孕みて三月なるなり」とあり、また前條の胚に「婦孕みて一月なるなり」という。合わせて胚胎という。「詩・周南・采芣」は子求めのための草摘みの歌で、采芣の音は胚胎の音と通じる。胎兒を胎といい、萬物生成の根源である萬法の理を含むところを、佛教では胎藏界という。</p>	<p>「台」の發音は、「し」だとするが、ここでも「始」については、ふれられていない。</p>
『字通』胎	<p>常【胎】9畫 7326 「字音」タイ「字訓」はらむ・はじめ 説文體 「形聲」聲符は台(たい)。台はム(し)(相(すき)の目形)に祝禱の器の口(さい)を加えて聖化する儀禮で、生産をはじめるとききの儀禮である。「説文」四下に「婦孕みて三月なるなり」とあり、また胚字條に「婦孕(はら)みて一月なるなり」とあり、合わせて胚胎という。丕(ひ)は草木の實がつき膨らむ形。「詩・周南・采芣(ふい)」は子求めの意をもつ草摘み歌で、采芣(ふい)(おおほこ)は胚胎の音と通じ、子求めの意となる。 ↓台・ム・胚 「訓義」 1. はらむ、みこもる。 2. なかこ、はらこもりのもの。 3. はじめ、もと、おこり。 4. やしなう。 「古訓」〔名義抄〕胎 ハジメ・ハジム・フトコロ・ハラム・ハラゴモリ・ヤシナフ・カタヒ 【胎育】たいいく(ひく) 胎兒中の教育。胎教。「太平御覽、四四七に引く魏の文帝、典論、論周成漢昭」或ひと、周の成王を漢の昭帝に方(くら)ぶる者有り。餘(われ)以爲(おも)へらく、周氏は聖考の作を體し、氣は賢妣の胎教を稟(う)く、夫(か)の孝昭は、父は武王に非ず、母は邑姜に非ず。體、聖を承けず、化、胎育せず。保に仁孝の德無く、佐に隆平の治無し。 【胎教】たいきょう(けう) 胎兒中の教育。「大戴禮、保傅」古者(いにしへ)胎教 王后之れを腹(みこも)ること七月にして宴室に就く。太史、銅を持して戸左に御し、太宰、升を持して戸右に御す。太子生まれて泣く。太師銅を吹きて曰く、聲、其律に中(あた)ると。太宰曰く、滋味菜(時味)に上れりと。然る後に名をト(うらな)ふ。 【胎生】たいせい 胎内で發育して生まれる。「莊子、知北遊」萬物は形を以て相ひ生ず。九竅(けう)なる者は胎生し、八竅なる者は卵生す。 【胎息】たいそく 道家の呼吸法。腹式呼吸の類。「後漢書、方術、王真傳」年且(まさ)に百歳ならんとす。之れを視るに面に光澤有り、未だ五十ならずる者に似たり。自ら云ふ、周流して五嶽名山に登り、悉(ことごと)く能く胎息胎食の法を行ふ。房室を絶たずと。 【胎髮】たいはつ(うぶげ) 胎毛。「西陽雜俎、藝絶」南朝に姥(ほ)老女(らんな)の善く筆を作るもの有り。蕭子雲、常に書に用ふ。筆心に胎髮を用ふと。 「下接語」營胎・福胎・鶴胎・含胎・玉胎・結胎・元胎・刳胎・子胎・珠胎・獸胎・聖胎・象胎・脫胎・奪胎・竹胎・天胎・胚胎・抱胎・剖胎・蛙胎・有胎・天胎・卵胎</p>	<p>※熟語については、出典の明記されているものだけを残した。</p>

4ヶ月	3ヶ月
<p>(四月)而水受之、乃使成血。其食稻麥、鯉魚(以)清血而明目。</p>	<p>三月始胎。三月如咀(如而三月而胎也。咀含味也。果隋宵效也。胎三月。雖形未當是之時。胎三月。雖形未見物而化。以自養。咀者何。是故君公大人。母使朱對曰。咀五味。五(保)儒。不味者何曰。五藏觀木(沐)(形木具、不能候(猴、不咀五味、故又問食函(葱)薑、五味者何、對曰、不食免羹。即母五藏之氣。欲產男、即母五藏之氣。置弧矢。鹹主肺、酸主脾、雄雉、乘牡、苦主肝、甘主心。馬、觀牡虎。五藏已具。而後欲產女、佩蠶(簪)耳。肝生骨、腎生髓(珥)呻(紳)耳。肝生革、心生肉。朱(珠)子。五肉已具。而後是謂內象成。發爲九竅。脾發爲鼻、肝發爲目、腎發爲耳、肺發爲竅。</p>
	<p>婦孕三月也。从肉台聲。土來切。</p>
四月而肌	三月而胎
	三月而胎
四月而胞	三月而胎
<p>四月而胎(如水中蝦蟆之)</p>	<p>三月而胎(胎胞也。三月如水龍狀也)</p>
<p>始受水精、以成血脈</p>	<p>娠娠三月、始胎。形像始化。</p>
<p>始受水精、以成血脈</p>	<p>至於三月、名曰始胎。名始胎、血脈而變。未有定儀、象形而化。欲生男者、見物而化。欲生女者、未分故未弄珠璣、可服藥方。欲子美好、術轉之令數視璧玉、生男也。欲子賢良、端坐清虛、而內感者。是謂外象也。</p>
<p>始受水精、以成血脈</p>	<p>娠娠三月、始胎、</p>
<p>成</p>	<p>三月始胞</p>
<p>骨</p>	<p>三月曰血脈、</p>
<p>懷身四月、始受水精、以盛血脈。其食稻梗、其羹魚膾、是謂盛血氣、以通耳目而行經絡也。四月手少陽脈養、不可針灸其經也。手少陽內屬三焦、靜安形體、和順心志、節飲食之。</p>	<p>懷身三月、名曰始胎。當此之時、未有定儀、見物而化、是故應見王公、后妃、公主、好人、不欲見僕者、侏儒、醜惡瘦人、猿猴、無食苗姜兔肉。思欲食果瓜、激味酸瓠瓜、無食辛而惡臭、是謂外象而內及故也。</p>

胎胎

【隸書】

胎胎

唐 蘇洪安墓誌

胎胎

唐 鄭國民公主碑

胎胎

唐 修定寺記碑

【楷書】

胎胎

北魏 元瞻墓誌

胎胎

東魏 王假墓誌

胎胎

唐 李泳夫人墓銘

胎胎

唐 李總持墓誌

胎胎

唐 無上道誌

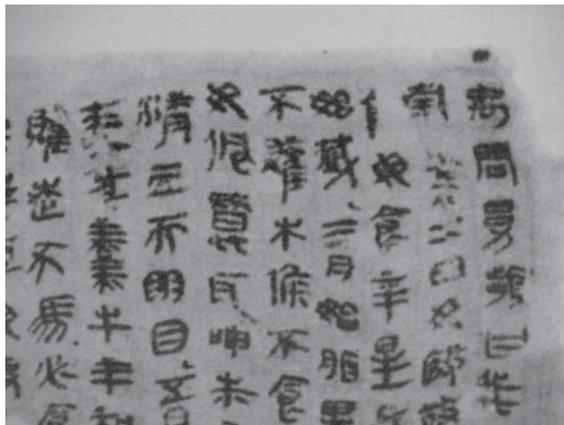
8



2



3



1



7



6



5



4

胎

tāi 透纽、之部；透纽、哈韵、土来切。

胎¹ — 胎² — 胎³ — 胎

春秋 战国 《说文》小篆 楷书

1 《甲金篆》261页。2 《郭店》75页。3 《说文》87页。

9

 老乙 一七九 善始且善成	 始 養 新乳始沐 〇六一
 易 〇三二 君子見始弗逆	 九 四〇三 臣主始不相吾(忤)也 合 一二二 始十

12

 殷墟文字類編	 殷墟文字類編	 殷甲骨文編	甲骨
 殷墟文字類編			金文
 殷墟文字類編			金文
 殷墟文字類編			金文
 殷墟文字類編			石鼓
 殷文			篆文

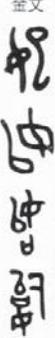
11

篆文

【始】
8

はじめ・はじめる・はじまる

金文



10

 女台 漢 漢石渠 【楷書】  女台 北魏 漢石渠	 女台 漢 漢石渠 【楷書】  女台 北魏 漢石渠	 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠	 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠
 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠	 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠	 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠	 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠
 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠	 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠	 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠	 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠
 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠	 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠	 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠	 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠
 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠	 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠	 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠	 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠

14

 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠	 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠	 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠	 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠	 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠	 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠	 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠	 始 漢 漢石渠 【楷書】  始 漢 漢石渠
---	---	---	---	---	---	---	---

13



漢晉 流簡紙

16



武威

15

